都市近郊における墓地設置に関する住民の意識比較と計画のあり方に関する考察

鈴木 雅和 *
菅 野 博 貢 **

A Study on Habitant's Consciousness for Cemetery Planning in Suburban Area

Masakazu SUZUKI

Hirotsugu KANNO

摘要: 都市部における墓地需要の高まりと、墓地不足は深刻な都市問題となっており、都市周辺部においては墓地供給の圧力が高まっている。本研究は、水戸市近郊の瓜連町における公園墓地計画策定に伴い、従来からの定住層と新規住宅団地に移住してきた住民における、墓地に関する意識の比較を行った上で、今後の墓地のあり方について考察したものである。その結果、新旧住民の間には、墓地需要の度合、埋葬・慰霊・墓地のあり方に関する意識、公園墓地の整備に際して望む事柄などに差があることが分かった。また、今後の公園墓地計画において、多様な慰霊形態を受け入れ管理することにより、墓地の不用意な拡大を抑制する可能性について考察した。

はじめに

明治期より、東京を中心としていくつかの公営の共葬地が設置され、大正期には多摩墓地をはじめとして、計画的な墓地が造成されたが¹⁾²⁾、その後の予想外の都市に対する人口の集中により、公営の墓地は増大する墓地需要に対してその要求を満たさできていない。そのような状況において昭和40年代の墓地ブームのように民間の墓地造成が特に郊外を中心として行なわれ、厚生省は、営利中心の墓地造成に対し自粛の通達を出したという経緯もある³⁾。しかし、都市の地価上昇に伴って、墓地使用料、管理料、墓地造成費も上昇し、墓地が高く、遠く、狭くなるという、第2の住宅問題といわれる現象が起きている。このような事態に対し、公営墓地の対策としては壁墓地や合葬による納骨堂などの高度な土地利用形態の形式を導入したり、使用の有期限化を図るなどの対応を試みているが⁴⁾、事態はいっこうに解決の兆しを見せない。一方、墓地の経済的な取得難に加え、家族形態の変化、価値観の多様化などに伴って慰霊意識も変化しており⁵⁾⁶⁾、本来の慰霊意識を尊重し、むしろ「個人で土地を占有する形式の墓地」を取得することにはこだわらないという意識が芽生え、具体的な活動もいくつか展開されるようになった⁷⁾。

1. 本研究の位置付け

従来墓地に関する研究は、民俗学的あるいは宗教学的アプローチがもっぱらである。墓地に関する計画的な研究は井下清など少数の研究者による成果がある。具体的に公園墓地という形式を定着させ、計画理論を建設省の

墓地計画標準などに反映させた点は高く評価される。しかし、それらは近年、あるいは、今後の墓地問題を見通したものとはなっていない。

本研究は、都市近郊において新規団地などの造成により人口が急増している地区において一般化しうる問題として、新規居住者層への墓地供給に関する問題を、茨城県那珂郡瓜連町をケーススタディーとして、住民の慰霊に関する意識と町営墓地設置に関する意識を調査することにより、今後の墓地計画のあり方に関する知見を得ようとするものである。その際、基本的には必ず墓地を求めて墓石を建て納骨するという慰霊形態があたかも古来より永続しており、今後も続くという考えを前提とするのではなく、散骨や合葬のように土地や墓石にとられない慰霊形態を取りたいという人々の慰霊の自由も保証すべきであるという前提にたって、今後の墓地問題を考察しようとするものである。本論文は、町営墓地設置が行政的課題となっている都市近郊において、住民の意識調査をもとに考察をまとめたものであり、今後の一連の研究における基礎的な導入部分として位置付けるものである。

2. 瓜連町における墓地構想

瓜連町は、茨城県水戸市から北に車で30分ほどの距離に位置し、面積15km²の小さな町である。地勢的には、久慈川と平行に水田の連なる後背湿地部分と町の中心市街や畑地の広がる台地部分、および新規開発した平野台住宅団地やゴルフ場の位置する瓜連丘陵部分の3つの平行するゾーンよりなっている。

*筑波大学芸術学系環境デザイン **東京大学大学院工学系研究科

瓜連町は、これまで長期にわたり約7,000人という人口で推移してきたが、昭和60年から新規に入居が開始された平野台住宅団地開発により、約9,000人へと急増してきている。人口の経年的変化を図-1に示す。最近増加した約2,000人の町民は（以降、新住民と呼ぶ）、県外あるいは水戸市内、瓜連町内からの住み替えが多いが、従来から定住している層（以降、旧住民と呼ぶ）と比べると、墓地取得の要求度が高いと予想された。町としては、住宅の供給や工業団地の開発、区画整理などにより人口の増加をはかり、安定的な発展を目指しているが、新住民の増加は、そのまま墓地の不足を招くことが予想され、この町をふるさととした長期的な定住を保障するために、一種の福祉政策として町営墓地の供給が検討されている。

計画候補となっている場所は、まだ正式には決定していないが、瓜連丘陵の一面であり、現況は緩やかな斜面でスギの植林地がほとんどである。民家には直接接していない。

3. 瓜連町住民の墓地に対する意識調査

(1) 調査方法

住民を平野台住宅団地（新住民）と、それ以外の地区の居住者（旧住民）に分け、（實際上平野台住宅団地以外の地区にも最近移住してきた住民が存在する可能性があるが、便宜上このような呼び方をしておく。）人口構成比により、住民台帳から成人を対象として無作為二段層化抽出した。アンケート対象サンプル数は新住民100人、旧住民400人の計500人である。これは全町民の約6%にあたる。アンケートは郵送により配付および回収を行った。

回収率は、新住民60%、旧住民41%であり、新住民の回収率が高いのは、墓地の設置に関する関心が高いことを示していると考えられる。全体では225通45%であり、郵送による方法としては高い回収率といえる。この場合、統計学的には95%信頼度で標本誤差の推定値は、おおむね50%±6%、30%±4%、10%±1%となる。

(2) 調査結果

旧住民と新住民の属性の比較を表-1に示す。男女比はほぼ同じであるが、年齢構成は旧住民がより高齢で、新住民は住宅取得世代である40代にピークがあることがわかる。新住民の職業は57%が給与所得者であるのに対して、旧住民は33%と低く、新住民には存在しない農業・自営業が30%を占める。表には示していないが、旧住民の81%は居住歴が10年以上であるのに対し、新住民は100%が10年未満である。ただし、永住指向については、両者とも87%と高い。持ち家率は共に非常に高い。

(i) 墓地使用権の所有状況と墓地需要

表-2に示すように、自分が守り、あるいは定期的にお参りする墓については、旧住民ではお参りする墓の無い

図-1 瓜連町の人口の経年変化

表-1 サンプルの属性

設問	旧住民 数	%	新住民 数	%	全体 数	%
性別						
男	88	55.3	26	43.3	114	52.1
女	71	44.7	34	56.7	105	47.9
計	159		60		219	
年齢						
20代	12	7.5	4	6.6	16	7.2
30代	26	16.3	20	32.8	46	20.8
40代	34	21.3	19	31.1	53	24.0
50代	28	17.5	12	19.7	40	18.1
60代	38	23.8	4	6.6	42	19.0
70代以上	22	13.8	2	3.3	24	10.9
計	160		61		221	
職業						
農業	25	15.6	0	0.0	31	14.0
自営業	23	14.4	0	0.0	23	10.4
勤め人	37	23.1	27	44.3	64	29.0
公務員	16	10.0	8	13.1	24	10.9
自由業（医師・弁護士など）	2	1.3	1	1.6	3	1.4
パートタイマー・アルバイト	8	5.0	7	11.5	15	6.8
専業主婦	20	12.5	10	16.4	30	13.6
無職（定年退職者を含む）	26	16.3	5	8.2	31	14.0
学生	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	3	1.9	3	4.9	6	2.7
計	160		61		221	

人が8%だったのに対して、新住民では31%であった。

お参りする墓のある人のうちで、その墓が自分個人の所有（ここで言う所有とは使用権の所有の意味、以下同じ。）である人は、旧住民で66%に対して、新住民で16%であった。つまり、新住民の墓参する墓のほとんどは、自己所有ではないことが分る。

瓜連町内にお墓を所有しているのは、旧住民では92%、新住民では4%であり、町内にお墓を所有している新住民は極めて少なく、74%が県内、22%が県外であり、逆に旧住民はほとんど町内に所有している。

町内にある墓について、地図上に図示してもらった。126人の図示があった解答のうち、多かったのが常福寺、弘願寺とその周辺、古徳共同墓地、通称ロマンロード周辺、久慈川南部、那珂中部用水路南部の国道沿いであるが、町内に散在している状況である。

墓参の回数は、新住民、旧住民の比較ではほとんど変わらず、両者とも年間3-5回が最も多かった。

自分あるいは家族が亡くなった場合に、入る墓がすでに確定しているかという質問に対して、旧住民は88%が確定していると答えたのに対して、新住民では43%であった。また、無いと答えた人のうち、旧住民の81%、新住民の92%の人が、将来墓が欲しいと答えている。

自分の墓の継承者の存在については、新、旧住民ともほとんど傾向は変わらず、全体で88%の人があると答えており、大半は配偶者、次いで子供が継承してくれると考えている。ただし、墓の無縁化を招く可能性として、12%の人が、「いない」あるいは「分らない」と答えていることも注目しておく必要があろう。

(ii) 墓地に関するイメージについて

瓜連町の現在の墓地および、これからの墓地に求めるイメージについて、墓地の雰囲気を表現していると思われる言葉から6つの形容詞対を選び、それらに対する5段階評価で表現してもらった。結果の平均値を図化したのが図-2である。新住民と旧住民の評価には有意な差がなく、両者ともこれからの墓地に対して、現在の墓地より、明るく、広々として、親しみやすく、美しいイメージを求めている。これは、現在の町の墓地には明らかに備わっていない特性である。静か、厳肅なというイメージについても、同様に求められているが、上記4者よりは求める度合いが少ない。これは、もともとそのようなイメージが定着しているためであろう。

(iii) 墓地の場所について

表-3上段に示すように、公園的な墓地を求めている人が全体で60%と最も多い。ただし、旧住民の49%に対して、新住民では93%と大部分が公園の墓地を希望している。これは今回のサンプリングにおいて、年齢別の違いというより、新住民に特有の傾向と考えられる。

この他、旧住民においては、寺院墓地22%、共同墓地18%が目立つが、これは現状の瓜連町の墓地のタイプを反映している。

(iv) 墓地のタイプについて

自分のお墓について、旧住民では先祖代々の墓を望んでいる人が69%と最も多く、家族墓は23%であった。新住民では家族墓が48%であり最も多く、明らかに旧住民に比較すると多い。これは、瓜連町に新しい住居を求め、核家族として独立した世帯が多いためであると考えられる。一方、先祖代々の墓を望んでいる人は31%であったが、ある意味では将来的に永く瓜連町に住みたいという永住志向の表れとも見ることができる。以上を表-3下段に示す。

これらを、50歳未満と50歳以上に分けて分析すると、50歳未満では、家族墓と先祖代々の墓に意見が別れているが、50歳以上においては先祖代々の墓を望んでいる人が72%と非常に多かった。以上を表-4に示す。

表-2 墓地の所有状況

設問	旧住民 数	旧住民 %	新住民 数	新住民 %	全体 数	全体 %
墓参する墓の有無						
有る	151	92.1	42	68.9	193	85.8
無い	13	7.9	19	31.1	32	14.2
計	164		61		225	
墓参する墓の所有						
自分の所有	99	65.6	7	16.3	106	54.6
親族の守っている墓	52	34.4	36	83.7	88	45.4
計	151		43		194	
年間の墓参回数						
1回未満	3	2.0	1	2.3	4	2.1
1回	4	2.7	3	6.8	7	3.6
2回	14	9.4	9	20.5	23	11.9
3~5回	87	58.4	26	59.1	113	58.5
5~10回	32	21.5	4	9.1	36	18.7
10回以上	9	6.0	1	2.3	10	5.2
計	149		44		193	
現在使用できる墓の有無						
有る	145	88.4	26	42.6	171	76.0
無い	17	10.4	31	50.8	48	21.3
分らない	2	1.2	4	6.6	6	2.7
計	164		61		225	
所有している墓の所在						
瓜連町内	134	91.8	1	3.7	135	78.0
茨城県内	10	6.8	20	74.1	30	17.3
その他(茨城県外の郷里など)	2	1.4	6	22.2	8	4.6
計	146		27		173	
所有している墓の所属						
お寺	64	44.8	11	40.7	75	44.1
公営	7	4.9	8	29.6	15	8.8
民営	9	6.3	0	0.0	9	5.3
個人	45	31.5	7	25.9	52	30.6
その他	14	9.8	1	3.7	15	8.8
分らない	4	2.8	0	0.0	4	2.4
計	143		27		170	
自分の墓の継承者の有無						
いる	145	90.1	48	81.4	193	87.7
いない	5	3.1	0	0.0	5	2.3
分らない	11	6.8	11	18.6	22	10.0
計	161		59		220	
自分の墓の継承者(いる人だけ)						
配偶者	30	17.6	22	37.3	52	22.7
子供	125	73.5	34	57.6	159	69.4
孫	1	0.6	0	0.0	1	0.4
兄弟	6	3.5	0	0.0	6	2.6
親類	5	2.9	1	1.7	6	2.6
その他	2	1.2	0	0.0	2	0.9
分らない	1	0.6	2	3.4	3	1.3
計	170		59		229

図-2 墓地に対するイメージ

(v)希望の墓石のタイプについて

写真-1を見せた上で、どのデザインのお墓を望むかを尋ねた結果を表-4に示す。旧住民は伝統的な和型の墓石を望んでいる人が68%と最も多く、洋型20%、芝生プレート型11%と続く。新住民は和型と洋型がまったく同数で36%、芝生プレート型26%と分離する。壁型は双方とも2%以下と少ない。壁型墓地は日本では馴染みがなくイメージしにくいためであろう。以上を表-3下段に示す。これを、50歳を境に年齢別に見てみると、50歳以上は圧倒的に和型を望んでいるのに対し、50歳未満では意見が分散している。希望する墓石のタイプは、墓地にかけられる費用と密接な関係があり、一般に和型、洋型、芝生プレート型、壁型の順に費用が安くなる。表には示していないが、墓にかけられる金額を尋ねたところ、新住民の方が旧住民より安価な墓地を求めている。

(vi)新たな慰霊形態としての合葬について

最初に「現在、都市やその近郊では土地問題などでお墓をつくることが大変難しくなっています。また、家族成員数の減少から無縁化してお墓も増え、深刻な問題となっています。このような中で、無縁化してお墓を合葬という形で一体的に祀ったり、また初めからこのような合葬を希望する人も増えています。」という形で合葬について説明した上で、合葬についての意見を尋ねた。この結果を平均値として図-3に示す。環境を破壊しないという点について、新住民は69%が肯定的に答えたのに対して、旧住民は47%が肯定的に答えている点を除き、新旧住民の解答パターンはほとんど同じであった。集約すれば、土地利用上は合理的であるが、他人と一緒に葬られるのはいやで、確かに環境を破壊せず経済的だと思うが、合葬は馴染みが無く不安である。管理上は安心であり、世間体が気になるということになる。

(vii)自然葬あるいは散骨について

お墓を作らずに遺骨を海や山に散布する葬法である自然葬あるいは散骨（厳密には自然葬には鳥葬なども含まれるが、ここでは日本で適用可能な散骨に限って議論する。）について尋ねた。自然葬そのものに対する知識については、表には示していないが、やや新住民の方が高

表-3 住民の望む墓地の形態

設問	旧住民		新住民		全体	
	数	%	数	%	数	%
望ましい墓所						
公園的な墓地	79	48.8	54	93.1	133	60.5
寺院墓地	35	21.6	0	0.0	35	15.9
共同墓地	29	17.9	4	6.9	33	15.0
先祖代々の墓地	10	6.2	0	0.0	10	4.5
分らない	6	3.7	0	0.0	6	2.7
その他	3	1.9	0	0.0	3	1.4
計	162		58		220	
望ましい自分の墓						
個人墓	4	2.4	1	1.6	4	1.8
夫婦墓	3	1.8	2	3.3	5	2.2
家族墓	38	23.0	29	47.5	67	29.8
先祖代々の墓	114	69.1	19	31.1	133	59.1
合葬墓	3	1.8	2	3.3	5	2.2
分らない	2	1.2	8	13.1	10	4.4
その他	1	0.6	0	0.0	1	0.4
計	165		61		225	
望ましい墓のデザイン						
和型	104	68.0	22	36.1	126	58.9
洋型	31	20.3	22	36.1	53	24.8
芝生プレート型	16	10.5	16	26.2	32	15.0
壁型	2	1.3	1	1.6	3	1.4
計	153		61		214

図-3 合葬に対する評価

めであるが、全体に83%の人が知っている、あるいは聞いたことがあると答えている。ただし、自分が亡くなった後の遺骨の取扱については、旧住民では絶対にお墓に入れてもらいたいとする人が66%と最も多かった。新住民では、できれば墓に入れてもらいたいとする人が39%と最も多く、必ずしも墓にこだわらないとする人も26%

和 型¹³⁾

洋 型¹³⁾

芝生プレート型¹¹⁾

壁 型¹⁸⁾

写真-1 墓石のタイプ

表－4 年齢別にみた住民の望む墓地の形態

設問	50歳以上		50歳未満		全体	
	数	%	数	%	数	%
望ましい墓所						
公園的な墓地	54	50.5	79	69.9	133	60.5
寺院墓地	22	20.6	13	11.5	35	15.9
共同墓地	18	16.8	15	13.3	33	15.0
先祖代々の墓	8	7.5	2	1.8	10	4.5
分らない	2	1.9	4	3.5	6	2.7
その他	3	2.8	0	0.0	3	1.4
計	107		113		220	
望ましい自分の墓						
個人墓	0	0.0	4	3.5	4	1.8
夫婦墓	2	1.8	3	2.6	5	2.2
家族墓	25	22.7	42	36.5	67	29.8
先祖代々の墓	78	70.9	55	47.8	133	59.1
合葬墓	2	1.8	3	2.6	5	2.2
分らない	3	2.7	7	6.1	10	4.4
その他	0	0.0	1	0.9	1	0.4
計	110		115		225	
望ましい墓のデザイン						
和型	75	76.5	51	44.0	126	58.9
洋型	13	13.3	40	34.5	53	24.8
芝生プレート型	9	9.2	23	19.8	32	15.0
壁型	1	1.0	2	1.7	3	1.4
計	98		116		214	
自分の遺骨の扱い						
絶対に墓に入れてもらいたい	72	72.0	48	42.5	120	56.3
できれば、墓に入れてもらいたい	17	17.0	38	33.6	55	25.8
必ずしも墓にはこだわらない	10	10.0	23	20.4	33	15.5
墓に入れないでもらいたい	0	0.0	2	1.8	2	0.9
分らない	1	1.0	2	1.8	3	1.4
計	100		113		213	
町営墓地の設置について						
ぜひ作って欲しい	37	40.2	35	31.8	72	35.6
条件次第では作っても良い	31	33.7	44	40.0	75	37.1
どちらとも言えない	12	13.0	23	20.9	35	17.3
できれば作って欲しくない	3	3.3	3	2.7	6	3.0
絶対作らないで欲しい	4	4.3	2	1.8	6	3.0
分らない	5	5.4	3	2.7	8	4.0
計	92		110		202

図－4 町営墓地設置に関して配慮すべき点

と、絶対墓に入れてもらいたいという人31%に対して同数程度存在することが分った。これを年齢別に見てみると、表－4に示すように、50歳未満ではある程度分散しているのに対して、50歳以上では、圧倒的に墓に入れて

欲しいという意見が多い。墓に対するこだわりは年齢に関係していることが分る。50歳以上の住民は居住歴が20年以上の人がほとんどであり、先祖代々の墓を守っている場合が多い。このため、家に対するこだわりがそのまま墓に対するこだわりとなっていることが予想される。

(viii)町営墓地の設置について

将来瓜連町に墓地を作ることについて、ぜひ作ってほしいという人が旧住民31%、新住民49%、条件次第では作っても良いという人が、旧住民39%、新住民31%であり、肯定的な意見を合計すると、全体で73%になる。できれば作って欲しくない、あるいは絶対作ってほしくないという否定的な意見は全体合計で6%と少なかった。表－4に示すように、年齢別に見ると、50歳未満では条件次第では作ってよいという人が最も多いのに対して、50歳以上では是非作ってほしいという人が最も多かった。高齢者ほど墓地の設置を望んでいることがわかる。墓地は自分の居住地付近に設置される場合、迷惑施設と受け取られがちであるが、意外に多くの人が町営墓地の設置を望んでいるといえよう。

(ix)町営墓地設置に関して配慮する点

町営墓地設置に関して配慮すべき点を15項目の中から一人5項目選択してもらい集計したものが図－4である。全体では、重視している点として、1位墓地の維持管理が良いこと、2位静かで美しい環境、3位日当たりの良いこと、4位十分な駐車場があること、5位将来的な管理システム（無縁化した場合でも、合葬により永代的に供養される等）であり、それほど重視されていない点は、15位荘厳で格調の高い墓地にする。14位墓地周辺の防犯に配慮する。13位豊かな緑の名所にする。12位多様な墓地タイプの選択を可能にする。11位民家のそばに設置しない、であった。新住民と旧住民で順位が大きく異なる項目は、公園的な利用を兼ねる点についてであり、新住民が2位に対して、旧住民は11位であった。また、多様な墓地タイプの選択を可能にする点については、新住民が8位に対して、旧住民が14位であった。その他の点についてはほぼ意見が一致している。公園の利用については、旧住民は高齢者が多く、公園利用に切実さを感じていないこと、多様な墓地タイプの選択については、新住民が希望する墓石のタイプについて意見が分散していることからわかるように、従来の和型以外の墓石タイプを望んでいることによると思われる。

4. 瓜連町における墓地計画に関する課題

以上の調査を踏まえた上で、今後の墓地計画のあり方について考察し、具体的な墓地供給の基本的考え方として以下の6点を提言した。（町の方針としては、まだ、最終的に決定しているわけではない。）

(1) 墓所の形式・形態を一律に統制せず、多様な選択肢

を用意する。場合によって(6)の目的のため散骨、合葬用の施設を設置する。

(2) 従来の暗い墓地イメージを、明るい町民の憩いの場所として公園的な形態とする。

(3) 墓地の建設・改修、監視、清掃、修景などの運営管理を適切に行う。

(4) すべての町民の死後を平等に尊厳を持って扱い、無縁化してもなんらかの形で慰霊されることを約束する。

(5) 整形で一定区画の墓所を大規模に造成することを避け、住宅地や工業団地、ゴルフ場の開発で残り少なくなった丘陵部の緑をできる限り保全する。

(6) 墓地使用の有期限化など循環的な利用を工夫することにより、面積を拡大せずに永続的に供給し続ける。

5. 研究の今後の課題と方向

慰霊意識の変化と墓地の計画的問題に関する著者らの研究はまだ始まったばかりで、本論文も基礎的な段階であるが、今後は具体的な計画作業と並行して、日本における都市化に対応した墓地のあり方を調査研究する。当面、具体的には、墓地計画と公園の利用の関係、墓地景観に関する評価、住民の自然葬に対する受け止め方、などについて、様々な立地において、住民の属性に対応して、慰霊意識と行動がどのような構造になっているかを明らかにしたいと考えている。

おわりに

最近、大学院の講義において学生約30人に対して、自分がどのように葬られたいかを聞いた際、7割程度の学生が現状のような墓地墓石にはこだわらないと答えた。アンケートとして、厳密な方法を採用したわけではないので確かなことは言えないが、慰霊形態に対する若い世代の考え方は明らかに変わりつつあるのではないだろうか。瓜連町の調査でも年齢による意見の違いが明らかであった。現在の墓地の形態が与えられ続けられれば、未来の居住環境に重大な影響が起ることは必然である。しかし、多様な慰霊形態を許容する墓所を公的に供給し、冷静な判断を迫れば、今後かなりの人が散骨や合葬などの方法を選択する可能性があるのではないだろうか。

謝辞：本研究の遂行にあたり、筑波大学芸術学研究科の鹿島蘭さん、芸術研究科の今井一隆君、芸術学群の坂口次郎君の協力を得た。記して感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 村越知世 (1981): 多磨霊園: 郷学舎, 150pp.
- 2) 田中深 (1981): 青山墓地: 郷学舎, 101pp.
- 3) 森謙二 (1993): 墓と葬送の社会史: 講談社現代新書, 268pp.
- 4) 藤井正雄 (1985): 墓地をめぐる環境の変化に対応した新しい霊園形態 (納骨堂のあり方) に関する研究: 全日本墓園協会, 98pp.
- 5) 槇村久子 (1992): 家族形態及びライフスタイルと墓・墓地についての意識: 造園雑誌55(4), 309-314
- 6) 槇村久子 (1990): 家族形態及びライフスタイルの変化と墓地のあり方: 造園雑誌53(5), 281-286
- 7) 安田睦彦 (1992): お墓がないと死ねませんか: 岩波ブックレットNo262, 62pp.
- 8) 墓地墓石研究会 (藤井正雄) (1981): 墓地墓石大事典: 雄山閣, 428pp.
- 9) 川崎市 (1992): 市営霊園のあり方に関する調査報告書, 65pp.
- 10) 川崎市公園緑地審議会 (1993): 長期的視点に立った市営霊園のあり方について答申, 85pp.
- 11) 松濤弘道 (1991): 世界の葬式: 新潮選書, 305pp.
- 12) 大山陽生監修 (1992): 墓園、緑地と環境緑化計画 (改訂版), フジテクノシステム
- 13) 霊園ガイド (1993): 第20号, 六月書房, 118p
- 14) 鯖田豊之 (1990): 火葬の文化, 新潮選書, 206pp.
- 15) 東京都建設局公園緑地部霊園課 (1986): 墓地等に関する法令集, 80pp.
- 16) 瓜連町 (1992): 第三次瓜連町総合計画, 161pp.
- 17) 瓜連町 (1993): 瓜連町公園墓地基本構想計画報告書, 100pp.
- 18) 内山正雄編 (1987): 墓園の計画・設計: 都市緑地の計画と設計: 彰国社, 147-156p

summary: Increasing demand for the cemetery in urban area becomes serious problem but the usable ground for the cemetery is undersupply especially in the suburban area. Urizura is one of the typical residential suburbs and located at the outskirts of Mito-city. Its population is composed of former habitants whose family has been living here for many generations and newcomers who moved here recently and live in Hiranodai housing development area. This study analyzes these residents comparatively and found that there're many differences between them as their degree of demand for their own grave, consciousness for type of cemetery, burial style, memorial service and burying place as it ought to be. Using this analysis as a basis, this study is to search for the possibility of various styles of grave to control unprepared spread of cemetery.